

17èmes Semaines des

CAHIERS DU CINEMA

du 17 janvier au 16 février 2014
à l'Institut français du Japon - Tokyo

90

1924 · 2014

90^e ANNIVERSAIRE
DU PARTENARIAT
CULTUREL
FRANCO-JAPONAIS
日仏文化協力90周年



JEUNES CINEASTES FRANÇAIS, ON N'EST PAS MORTS!

フランスの新世代映画監督 特集

PASSION POUR JEAN GRÉMILLON

ジャン・グレミヨン特集

Invité spécial :

Vincent Macaigne

(acteur, metteur en scène, réalisateur)

Stéphane Delorme

(rédacteur en chef des Cahiers du Cinéma)

Takayuki Nitta

(historien du cinéma français)

特別ゲスト:

ヴァンサン・マケーニユ

(俳優、演出家、監督)

ステファン・ドゥロルム

(「カイエ・デュ・シネマ」編集長)

新田孝之

(フランス映画史研究)

第17回 カイエ・デュ・シネマ週間

2014年1月17日(金)～2月16日(日)

アンスティチュ・フランセ東京

INSTITUT
FRANÇAIS

アンスティチュ・フランセ東京
JAPON - TOKYO

今回で17回目を迎える「カイエ・デュ・シネマ週間」は、新世代の才能溢れる若い監督、俳優たちにフォーカスして最新のフランス映画をご紹介します。新しい作風を作り出そうという熱意を持ち、様々な困難を切り抜けながら前進している新世代の映画人たちが。彼らの中心にいて、若手監督から引っ張りだこの俳優で、日本でもギヨーム・ブラック監督の『女っ気なし』、『遭難者』が公開され、人気上昇中のヴァンサン・マケーニュを特別ゲストとして迎えます。

この特集ではフランス映画の中で(再)発見すべきクラシック作品、作家も紹介してきましたが、今回は「呪われた映画作家」ジャン・グレミヨン東京フィルムメックスに引き続き特集します。「フランス映画におけるもっとも美しく、厳しく、愛情に満ちた、つまり最高のもの」(ステファン・ドゥロルム)と評されるグレミヨン作品を一挙ご紹介いたします。

Pour la 17^{ème} édition des « Semaines des Cahiers du Cinéma », nous allons présenter un focus sur la nouvelle génération de cinéastes et d'acteurs français en vogue, réunissant jeunesse, talent et originalité. Parmi eux, Vincent Macaigne, metteur en scène de théâtre, cinéaste et acteur, nous fera l'honneur de sa venue au Japon. En tant qu'invité spécial, il présentera ses films comme acteur et réalisateur. La programmation sera complétée par une rétrospective sur Jean Grémillon, l'éternel maudit du cinéma français. Son cinéma est « ce que le cinéma français peut offrir de plus beau, de plus dur et de plus tendre : de meilleur. » (Stéphane Delorme)

17^{èmes} Semaines des
**CAHIERS
DU
CINEMA**

RÉTROSPECTIVE
JEAN GRÉMILLON

第17回 カイエ・デュ・シネマ週間
フランスの新世代映画監督 特集
ジャン・グレミヨン特集



ヴァンサン・マケーニュ プロフィール

1978年生まれ。コンセルヴァトワール(フランス国立高等演劇学校)卒業。舞台演出家として活躍後、映画俳優、監督として活動の幅を広げる。いまフランスで最も注目されている俳優の一人である。舞台演出家としては、2011年アヴィニオン演劇祭で発表した『ハムレット』を脚色した『少なくとも美しい死体を残すだろう』が話題をよぶ。映画では、フィリップ・ガレルの『灼熱の肌』のほか、ギヨーム・ブラック、ジュスティン・トリエ、セバスチャン・ベッペデ、アントナン・ペレジャコら新世代の映画監督たちの作品に次々に出演し、その独特の魅力で一気にファンを増やし、2013年のカンヌでも人気をさらった。現在、自身の監督作の傍ら、出演作として、ミア・ハンセン＝ラヴ、ルイ・ガレル、ヴァンサン・マリエットの作品が待機している。

「映画、舞台、ダンス、すべてはある種の振る舞いに過ぎない。無抵抗で死を迎えることを避けるために創作する。芸術ってというのはそういうものなんだ。それを実現するために、僕たちにとって必要なのは、愛であり、友情であり、本物の友人をえるための敵なんだ！」

—ヴァンサン・マケーニュ
(カイエ・デュ・シネマ 688号「コロニーからのSMS」より)

Les Rencontres d'après minuit de Yann Gonzalez
『真夜中過ぎの出会い』監督:ヤン・ゴンザレス

*この特集はアンスティチュ・フランセ日本の他の支部、横浜、京都、九州に巡回予定です。
横浜:3月、4月、5月、6月(詳しい日程はお知らせします)・・・会場:東京藝術大学(横浜・馬車道校舎)
福岡:2月8日(土)~2月11日(火・祝)・・・会場:KBCシネマ
京都:2月15日(土)・16日(日)・・・会場:京都シネマ
La circulation de ce programme est prévue à Yokohama, Kyoto et Fukuoka:
Yokohama : en mars, avril, mai et juin à l'Université Geidai (Bashamichi)
Fukuoka : du 8 au 11 février à KBC Cinéma de Fukuoka
Kyoto : les 15 et 16 février à Kyoto Cinéma

JEUNES CINÉASTES FRANÇAIS, ON N'EST PAS MORTS!

フランスの新世代映画監督 特集

CAHIERS
CINEMA



湖の見知らぬ男 *L'Inconnu du lac* d'Alain Guiraudie

[2013年/97分/カラー/DCP上映]

監督:アラン・ギロディー

出演:ピエール・ドイラドンシャン、クリストフ・パウ、パトリック・ダスマサオ、ジェローム・シャバット、マチュー・ヴェルヴィッシュ

ある夏、湖の畔に隠れた男たちのハッテン場で、フランクはミシェルに恋をした。美しく、力強く、危険なミシェル。ある殺人現場を目撃してしまったフランク。その事件にミシェルが関わっている疑問を持ちながらも、彼への情熱を生きようとするが…。2013年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門で上映され、絶賛され、世界的にも高い評価を得ている鬼才アラン・ギロディーの長篇4作目。

◆『湖の見知らぬ男』はおそらくアラン・ギロディーのもっと美しい作品である。編集を抽象化し、視線や場所、距離の戯れを見せるその方法によって、ギロディーはこれまでにない見事なデクパージュの技法に到達している(…)時代あらゆる定義づけを超えて、本作は神話の次元に到達している。——ジャン＝セバスティアン・ショーヴァン「カイエ・デュ・シネマ」



真夜中過ぎの出会い *Les Rencontres d'après minuit* de Yann Gonzalez

[2013年/91分/カラー/DCP上映]

監督:ヤン・ゴンザレス

出演:ケイト・モラン、ニール・シュナイダー、ニコラ・モーリー、エリック・カントナ、アラン＝ファビアン・ドロン、ベアトリス・ダグ

一組の若いカップルと女装趣味のメイドが、真夜中に繰り広げる乱痴気騒ぎ。そこに招かれているのは、尻軽女にスター、種馬やティーンエイジャーたち。ヤン・ゴンザレスの監督初長編。2013年カンヌ国際映画祭「批評家週間」特別上映作品。

◆鈍いならされることのない性についての寓話、集団についての美しい映画、陰鬱なる喜劇の形を取った旅する映画、『真夜中過ぎの出会い』はそのすべてであり、すでにそれだけでも素晴らしいのだが、ラストにあんなプレゼントしてくれる作品はほとんどないだろう。それぞれが恐れることなく自分なりのカーニヴァルに身を投じていくのだ。——ジョアキム・ルバスティエ「カイエ・デュ・シネマ」



ソルフェリーノの戦い *La Bataille de Solferino* de Justine Triet

[2013年/94分/カラー/DCP上映]

監督:ジュスティヌ・トリエ

出演:レティシア・ドゥッシュ、ヴァンサン・マケニュー、アルチュール・アラリ、ヴィルジール・ヴェルニエ、マルク＝アントワヌ・ヴォージュワ

2012年5月6日、大統領選の第二回投票当日。テレビリポーターのレティシアは、ソルフェリーノ通りの群衆の中、取材をしなければならぬが、今日が娘たちとの面会日だと信じている元夫のヴァンソンが押しかけて来て…さあ、戦いが始まった! 彼らの周りには、泣き叫ぶ娘たちに手一杯のベビーシッター。招かれざる客、人間嫌いの弁護士、歓喜に沸く人々と悲嘆にくれる人々…。すべてが入り混じって…どうなることやら!

◆『ソルフェリーノの戦い』は悪夢へと転じる一日を描く、ソコセッシの『アフター・アワーズ』にも近い熱に浮かされたようなコメディであり、愛と政治が混在している叙事詩的映画である。この作品のドキュメンタリー側面(作品の大半はパリの歩道、バスティユ広場やフランス社会党の本部などで2012年5月6日に撮影されている。)は、実験的な作品を作るためではなく、現在起こっている歴史的な出来事、自分たちの生きる時代を恐れずに捉えるためにある。——ステファン・デュ・メスニルド「カイエ・デュ・シネマ」



僕たちに残されるもの *Ce qu'il restera de nous* de Vincent Macaigne

[2011年/40分/カラー/DCP上映]

監督:ヴァンサン・マケニュー

出演:ティボー・ラクワフ、アントニー・バリオッティ、ロール・カラミー

父の死に向き合うふたりの兄弟の悲劇的な物語。一方は愛されるも、他方は不当に見放され、父は、彼には何も残さなかった。金銭に興味がなく、必要としない、お気に入りの息子がすべてを受け継いだのだ。舞台演出家で、俳優でもあるヴァンサン・マケニューの初監督作品。

◆この映画の奇跡、それは陰気な土壌から、天上的ともいえるなにかを引き出すことに成功していることだ。ここには、美は瘴癘的であるという確固たる信念がある。(…)この映画は、私たちの心に大きく残るだろう。——ジャン＝ジャッキー・ゴールドバーグ「レ・ザンロキョブティブル」

*ヴァンサン・マケニュー主演の以下の2本を同時上映します

キングストン・アベニュー *Kingston Avenue* d'Armel Hostiou [2012年/38分/カラー] 監督:アルメル・オスティウ

三人のルール *La Règle de trois* de Louis Garrel [2011年/17分/カラー] 監督:ルイ・ガレル



7月14日の娘 *La Fille du 14 juillet* d'Antonin Peretjatko

[2013年/88分/カラー/DCP上映]

監督:アントナン・ペレジャトコ

出演:ヴィマラ・ボンス、ヴァンサン・マケニュー

7月14日、勤務先のルーブル美術館でトリュケットという娘に出会ってからというもの、エクトルの頭は彼女の事でいっぱい。友人のバトルも巻き込んでトリュケットとその友達シャルロットを海に誘う。シャルロットの弟ベルティエも仲間に加わり、いざ海をめざしてフランスの田舎道を進むが彼らのほかに車はない…。というのも、世の中は経済危機のただ中なのだ。そんな時、政府はバカンスを1か月短縮することを決定し、国民に早々に仕事を再開するよう要請!? はたして7月14日の娘たちは無事に海にたどり着けるのだろうか…。2013年カンヌ映画祭監督週間出品作品。

*この作品は「第4回マイ・フレンチ・フィルム・フェスティバル」でも配信されます。

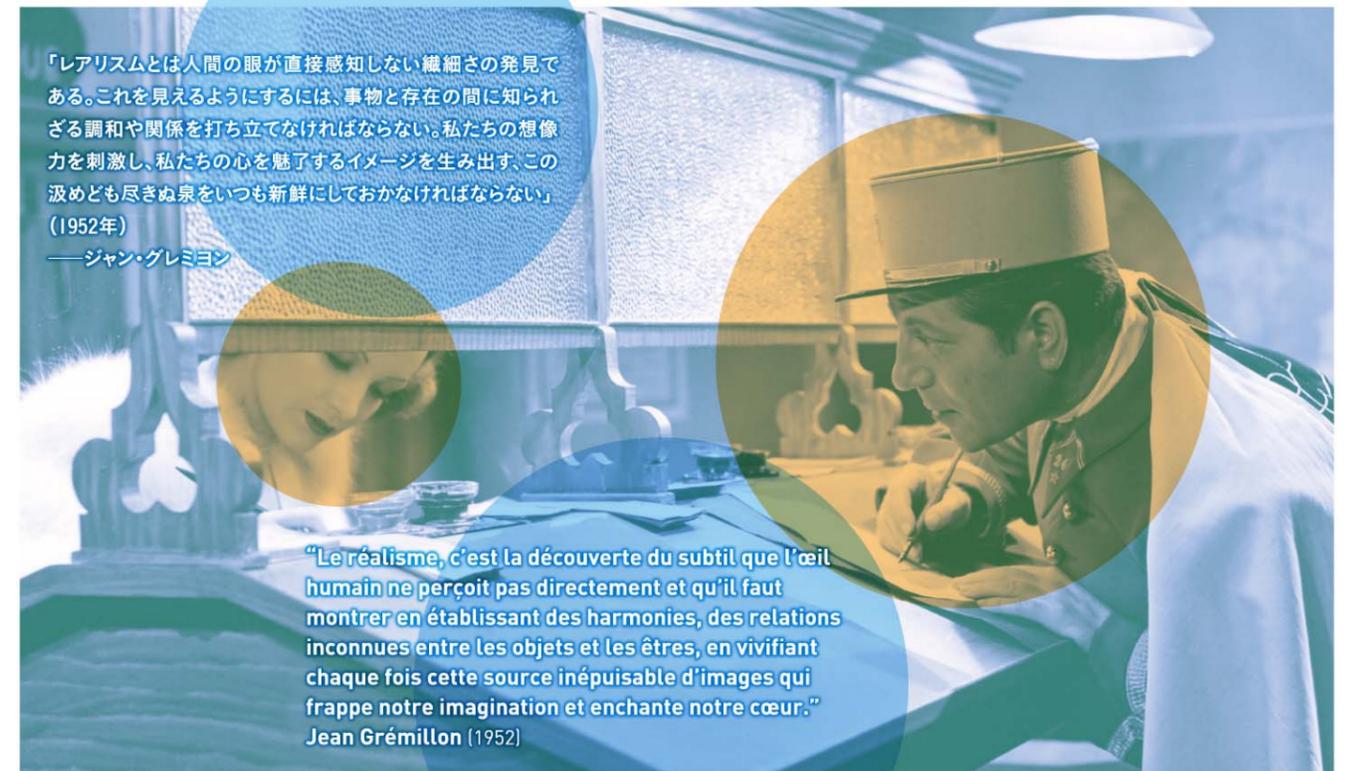
◆クレイジーなロード・ムービーの中であらゆることが往來し、そうした逃避行から詩が生まれる。——ジャン＝パピヤスト・モラン「レ・ザンロキョブティブル」

ジャン・ルノワールやルネ・クレールら同時代の映画監督と比べ、あまりその名前が知られることはなく、「呪われた映画作家」とさえ呼ばれてきたジャン・グレミヨン。しかしながら、フランス映画史上、最も偉大で、最も詩的な監督のひとりです。サイレント時代から撮り始めたグレミヨンの作品には、サイレントとトーキー、その両方の最良の形が見出せます。ドキュメンタリー、実験映画、劇映画の領域にまたがり「感情のリアリズム」と定義される独自の「リアリズム」を生み出し、人間と自然(水、岩、波、土)との結びつきや人間関係の秘められた意味を探求したグレミヨン。『カイエ・デュ・シネマ』は2013年10月号でこの雑誌としては異例とも言える大特集を組みました。フランス国外でもここ数年、ウィーン、ローザンヌ、ポロニヤ、エジンプラ、そして東京フィルメックスと、各地のシネマテークや映画祭で回顧展が催されるなど世界的に再評価の機運高まるジャン・グレミヨン、その全貌をご紹介します。

フランス映画史研究家の新田孝行、「カイエ・デュ・シネマ」編集長ステファン・ドゥロルムによる講演も予定しております。

A LA DÉCOUVERTE DE JEAN GRÉMILLON

ジャン・グレミヨン特集



「リアリズムとは人間の眼が直接感知しない繊細さの発見である。これを見えるようにするには、事物と存在の間に知られざる調和や関係を打ち立てなければならない。私たちの想像力を刺激し、私たちの心を魅了するイメージを生み出す、この汲めども尽きぬ泉をいつも新鮮にしておかなければならない」(1952年)

——ジャン・グレミヨン

“Le réalisme, c'est la découverte du subtil que l'œil humain ne perçoit pas directement et qu'il faut montrer en établissant des harmonies, des relations inconnues entre les objets et les êtres, en vivifiant chaque fois cette source inépuisable d'images qui frappe notre imagination et enchante notre cœur.”
Jean Grémillon (1952)

ジャン・グレミヨン プロフィール

1901年にノルマンディー地方のバイユーで生まれる。鉄道会社に勤める父の仕事の関係でプルターニュ地方を転々とする少年時代を送った後、音楽家を目指しパリに上京、ヴァンサン・ダンディが創設したスコラ・カントルムで作曲を学ぶ。パリの映画館マックス・ランデルで伴奏音楽のヴァイオリニストとして働いていた時、映写技師だったジョルジュ・ベリナルと知り合い、1923年に大聖堂で有名なシャルトルについてのドキュメンタリーを撮る。以後、ドキュメンタリー監督として着実にキャリアを積み重ね、1928年、俳優のシャルル・デュラン製作・主演で初の長編劇映画となる『マルドヌ』を発表。二重露光、スローモーション、クイックモーションなどの手法を大胆に組み合わせた実験的なスタイルで一躍脚光を浴びる。翌年、グラン・ギニョール劇場の芝居に基づく『燈台守』の監督を任される。プルターニュ地方の荒涼とした海、風などを造形的主題として自然と人間とが相互に浸透しあう独自の映像美学を確立し、ジャン・エプスタイン、マルセル・レルビエらと並びフランス前衛映画を代表する監督として知られるようになる。1930年、シャルル・スパークの脚本による初のトーキー映画『父帰らず』を発表。アンリ・ラングロワに「トーキー作品の最初の成功作」と言われしめ、レオス・カラックスにも多大なる影響を与えた本作は公開時、興業的には惨敗、以後不遇の時代を過ごす。スペインで監督したサルスエラの映画化『哀しみの処女』(1934年)は当地で成功を収め、ルイス・ブニュエル製作の『番兵、注意せよ!』(1937年)でも演出を担当した。一方、ベルリンに赴き、ウーファ・スタジオでドイツ映画のフランス版を監督、プロデューサー、ラオール・

プロカンの信頼を得る。プロカン製作の第三作、ジャン・ギャバンを主演に迎えた『愛慾』(1937年)は大ヒット作となり、南仏の人気俳優レイミュ主演の次作『不思議なヴィクトル氏』(1938年)とともに、名監督のフランス映画界への復帰を印象づけた。1939年夏、ジャック・プレヴェールの脚本による『曳き船』の撮影をスタートするがその直後、第二次世界大戦が勃発、総動員令のため中断を余儀なくされる。41年ようやく完成した本作では、サイレント映画の主題だった「海」が重要な登場人物として帰郷する。翌42年、再びプレヴェールと組んでパロディ的メロドラマ『高原の情熱』を撮る。女性飛行士の実話に基づく感動作『この空は君のもの』(1944年)は対独協力者とレジスタンス、双方の批評家から称賛された。第二次大戦中はレジスタンス運動に参加。共産党の支持者であり、戦争直後は、歴史上の大事件や戦争を題材に民衆を主人公として描く、従来の作風とは全く異なる映画を企画するものの、資金不足や冷戦の始まりにより頓挫。シネマテーク・フランセーズの会長(1943~58年)をはじめ様々な要職を歴任する一方、映画作家としては再び創作の困難に直面する。『白い足』(1948年)では原作者ジャン・アヌイの代役として演出を引き受けた。『ある女の愛』(1953年)は働く女性の仕事と恋愛をめぐる葛藤を主題とする。自ら脚本を書いた本作が最後の劇映画となった。「映画作家=音楽家」とも呼ばれ、パリ解放直後の故郷ノルマンディーを撮影した『6月6日の夜明け』や、晩年に妻クリスチヌとともに製作した美術に関するドキュメンタリーでは自ら音楽も担当している。1959年、パリで死去。

CALENDRIER 上映スケジュール

1月17日(金) 17 jan.	16:30	アンドレ・マッソンと四元素 <i>André Masson et les quatre éléments</i> (20分/無字幕) イメージの家 <i>La Maison aux images</i> (19分/無字幕) 6月6日の夜明け <i>Le Six juin à l'aube</i> (41分/無字幕)
	19:00	この空は君のもの <i>Le Ciel est à vous</i> (105分/英語字幕付)
1月19日(日) 19 jan.	12:00	高原の情熱 <i>Lumière d'été</i> (109分/日本語字幕付)
	14:30	不思議なヴィクトル氏 <i>L'Etrange monsieur Victor</i> (100分/日本語字幕付)
1月24日(金) 24 jan.	16:00	この空は君のもの <i>Le Ciel est à vous</i> (105分/英語字幕付)
	19:00	燈台守 <i>Gardiens de phare</i> (70分/日本語字幕付) *上映前、ステファン・ドゥロルムによる作品紹介あり *précédé par une présentation de Stéphane Delorme
1月25日(土) 25 jan.	12:30	不思議なヴィクトル氏 <i>L'Etrange monsieur Victor</i> (100分/日本語字幕付)
	15:00	高原の情熱 <i>Lumière d'été</i> (109分/日本語字幕付)
1月26日(日) 26 jan.	11:30	アンドレ・マッソンと四元素 <i>André Masson et les quatre éléments</i> (20分/無字幕) イメージの家 <i>La Maison aux images</i> (19分/無字幕) 6月6日の夜明け <i>Le Six juin à l'aube</i> (41分/無字幕)
	14:00	ある女の愛 <i>L'Amour d'une femme</i> (104分/英語字幕付)
	17:00	白い足 <i>Pattes blanches</i> (92分/日本語同時通訳付)
1月31日(金) 31 jan.	16:00	ある女の愛 <i>L'Amour d'une femme</i> (104分/英語字幕付)
	19:00	不思議なヴィクトル氏 <i>L'Etrange monsieur Victor</i> (100分/英語字幕付)
2月1日(土) 1 fév.	13:00	スニーク・プレヴュー
	15:30	曳き船 <i>Remorques</i> (81分/英語字幕付)
2月2日(日) 2 fév.	12:00	白い足 <i>Pattes blanches</i> (92分/日本語同時通訳付)
	14:30	マルドローヌ <i>Maldone</i> (102分/無字幕)
2月14日(金) 14 fév.	16:00	僕たちに残されるもの <i>Ce qu'il restera de nous</i> (40分/英語字幕付) キングストン・アベニュー <i>Kingston Avenue</i> (38分/英語字幕付) 三人のルール <i>La Règle de trois</i> (17分/英語字幕付)
	18:30	7月14日の娘 <i>La Fille du 14 juillet</i> (88分/日本語字幕付) *上映後、ヴァンサン・マケニューによるティーチンあり *suivi d'une rencontre avec Vincent Macaigne
2月15日(土) 15 fév.	13:00	僕たちに残されるもの <i>Ce qu'il restera de nous</i> (40分/英語字幕付) キングストン・アベニュー <i>Kingston Avenue</i> (38分/英語字幕付) 三人のルール <i>La Règle de trois</i> (17分/英語字幕付)
	15:30	ソルフェリーノの戦い <i>La Bataille de Solferino</i> (94分/英語字幕付)
2月16日(日) 16 fév.	14:30	ソルフェリーノの戦い <i>La Bataille de Solferino</i> (94分/英語字幕付)
	17:00	湖の見知らぬ男 <i>L'Inconnu du lac</i> (97分/英語字幕付)

- プログラムはやむを得ぬ事情により変更されることがありますが予めご了承ください。
- 入場料金：会員500円/学生800円/一般1,200円
- 2月1日、2日のスニーク・プレヴューは入場無料。整理券順の入場となります。
- 当日の1回目の上映の1時間前より、すべての回のチケットを発売します。開場は20分前。全席自由、整理番号順での入場とさせていただきます。

Tarifs d'entrée aux projections

- Adhérents : 500 yens, étudiants : 800 yens, non-adhérents : 1200 yens
- Les séances de « Films surprise » sont gratuites.
- Les billets sont mis en vente 1 heure avant la 1^{ère} séance de la journée, Ouverture des portes 20mn avant la séance.

「第17回カイエ・デュ・シネマ週間」

主催：アンスティチュ・フランセ日本
 助成：アンスティチュ・フランセ本部
 特別協力：アニエスベー、ユニフランス・フィルムズ
 フィルム提供及び字幕協力：フランス国立映画センターアーカイヴ、アテネ・フランセ文化センター、シネマテーク・フランスーズ、シャヤ・フィルム、エセック・フィルムズ、フィルム・ブティック、レ・フィルム・デュ・ロザンジュ、ゴーマン、インディペンデントシア・プロダクション、カザック・プロダクション、MK2、東京国立近代美術館フィルムセンター、タマサ・ディストリビューション、東京フィルメックス、ZZプロダクション

17^{èmes} Semaines des Cahiers du Cinéma

organisé par l'Institut français du Japon
 avec le soutien de : Institut français, agnès b., uniFrance Films,
 merci à : Archives françaises du film du CNC, Centre Culturel de l'Athénée français, Chaya films, Cinémathèque Française, Ecce Films, Films Boutique, les Films du Losange, Gaumont, Independencia Productions, Kazak Productions, MK2, National Film Center, Tamasa Distribution, Tokyo FILMeX, ZZ Productions

会場・お問い合わせ アンスティチュ・フランセ東京(旧東京日仏学院)

〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15

tel:03-5206-2500 fax:03-5206-2501 www.institutfrancais.jp



心を潤す
映画のテイクアウト

uniFrance films

第4回 マイ・フレンチ・フィルム・フェスティバル

2014年1月17日～2月17日
 my French Film Festival.com

「マイ・フレンチ・フィルム・フェスティバル(myFFF)」はユニフランス・フィルムズが世界中で展開するオンライン映画祭です。日本語を含め、13か国語で最新のフランス映画をご紹介します。若手監督の作品を中心に長編および短編映画が各10作品がコンペティション部門に出品され(日本では長編作品の配信は全9作品)、会期後には、観客賞のほか、ジャン＝ピエール・ジュネやマルコ・ベロッキオら国際的な映画監督が審査員をつとめる審査員賞も発表されます。今年からは自閉症の妹サビーヌを主題としたドキュメンタリー『彼女の名はサビーヌ』で高い評価(2007年カンヌ映画祭批評家/監督週間部門 国際批評家連盟賞受賞)を受けたフランスを代表する女優、サンドリーヌ・ボネールの監督第2作目となる『ウェイ・ホーム ～息子への想い～』など、話題作が揃いました。全ラインナップは公式サイトでご確認ください。myFFFは公式サイトのほか、iTunesでもご覧いただけます。

長編日本語字幕協力：映画美学校 映画翻訳講座

www.myfrenchfilmfestival.com